# 第四章　枕詞の行方―平安朝における枕詞の変容―

## 第一節　枕詞の伝統―枕詞と「古事」―

平安朝の和歌において、使用されている枕詞として目立つのは、萬葉後期においても、すでに固定化をみせていた「あしひきの」「ひさかたの」といった例であり、[1] 枕詞がさらに常套的になっていることは否めない。ただし、かような情況にあって、平安朝の枕詞のあらたな動向として指摘されている、枕詞の名詞化、枕詞の、縁語によって歌を統一する際の起点としての役割（真下和子氏「三代集の枕詞」、「女子大文学」第十六号）、さらに、枕詞の、伝統的な古歌詞としての使用（滝沢貞夫氏「拾遺集時代の枕詞」、「国語と国文学」昭和四十八年一月号）の三つの点は、枕詞の性質の変容を窺う上で、きわめて肝要といえよう。

枕詞を通時的にみたばあい、まず、枕詞の古歌詞としての使用という点にかかわって、奈良朝末期の、藤原浜成『歌経標式』に、「古事」の用語のみえることが注意される。『歌経標式』には、三種の「歌体」の一つとして「雅体」[2] が掲げられており、そこに属する十種の項目中の六項目に「古事」の語が用いられている。しかも、この「古事」の示すところに、「引津」にかかる「梓弓」、「奈良」にかかる「あをによし」といった枕詞が含まれており、「枕詞」と「古事」との関わりを考察すること

は、当時、枕詞がいかに受け止められていたのかを知る手がかりになると考えられるからである。『歌経標式』から、件の箇所を引用する。

六　頭古腰新。古事を以て発句に陳べ、新意を以て三句に陳ぶるは、是雅麗なり。

当麻大夫の伊勢に陪駕して婦を思ふ歌に曰へるが如し。

あづさゆみ（一句）ひきつのへなる（二句）なのりそも（三句）はなはさくまで（四句）いもあはぬかも（五句）

（略）

「梓弓」は是れ古事の喩にして、「引津」は是れ喩の名なり。「莫乗」は新意の状にして、「開花」は、是れ新しき物（色）なり。「妹に相はぬか」は是れ結句とす。

「梓弓」は絃木の名、「引津」は井の名、「莫乗」は水草の名なり。以て引きの喩を陳べむと欲し、故に、「梓弓」を以て発句に陳べて古事とし、弓を以て引きの名を顕す。故に、古事を以て初句に陳べて、二句の名を顕し、実の草依りて出づ。故に、水草の名に依りて新意の状を陳べ、三句に着けて四句の物（色）を陳ぶ。三句は歌の腰となす、故に、腰新と曰う。

…

七　頭新腰古。新意を以て発句に陳べ、古事を以て三句に陳ぶるは、是妙佳となすなり。

長田王の婦に恋ふる歌に曰へるが如し。

あきやまの一句もみちはじむる二句しらつゆの三句いちしろきまで四句いもにあはぬかも五句

「あきやま」は発句にして新意、「もみち」は二句にして物（色）、「しらつゆの」は三句にして古事、「いちしろ」は四句にして喩の名、「いもにあはぬかも」は五句にして結句なり。

…

八　頭古腰古。第一句、古事を陳べて頭とし、第三句、古事を陳べて腰とす。頭と腰と並びに古事を陳ぶるが故に頭古腰古と曰ふ。是の体、或は相対する有り、或は、相対する無し。青と黄等の如し。余も亦准へ知れ。

春を詠む歌に曰へるが如し。

あをによし一句ならやまがひよ二句しろたへに三句このたなびくは四句はるかすみなり五句

「あをによし」「しろたへに」は、並びに古事にして、亦相対をなす。

九　古事意　凡そ是の体、但一例のみに非ずして、亦、定むる処無く四句の中に交錯す。

龍田山を詠む歌に曰へるが如し。

かぜふけば一句くものきぬがさ二句たつたやま三句いとにほはせる四句
あさがほがはな五句

「雲の蓋」は是れ二句、「立田」は是れ三句、二句の「蓋」の喩に依りて、三句の山の名を顕す。故に、古事意と曰ふ。

十

新意体。是の体、古事に非ずして、亦直語に非ず、或は相対有り、或は相対無し。故に新意と曰ふ。

孫王塩焼の恋の歌に曰へるが如し。

しほみてば一句いりぬるいその二句くさならし三句みるひすくなく四句
こふるよおほみ五句

数々見ぬは、譬ふるに、潮の盈つる磯の如し。盈つる時に見えず、落つる時纔かに見ゆる故に、敛めて喩となす。古に遠く直を離る。故に新意と曰ふ。「見る目少なく恋ふる夜大み」曰、是れ相対なり。是の体と古・直、相似て、等しくして、亦別かち難し。消息を以てすべし。対する無きは、詠に曰へるが如し。

あきはぎは一句さきてちるらし二句かすがのに三句なくなるしかの四句こゑをかなしみ五句

亦、藤原里官卿の新田部親王に贈り奉る歌に曰へるが如し。

みなそこへ一句しづくしらたま二句たがゆゑに三句こころつくして四句わがおもはなくに五句

第一二句は是れ直語に非ず、三四句は是れ直語とす。三等句を以て一二句の情を顕す。故に、新意と名づく。余も、亦准へ知れ。

ここでまず注目すべきは、「古事」と「新意」とが、「六　頭古腰新」「七　頭新腰古」の項において、発句と三句あるいは三句と発句に置かれているという、「古」と「新」との対比的な使用である。「古事」のばあい、『『梓弓』は是れ古事の喩にして、『引津』は是れ喩の名なり」、「引きの喩を陳べむと欲し、『梓弓』を以て発句に陳べて古事とし、弓を以て引きの名を顕す」（いずれも「六　頭古腰新」）のように、「古事」が「喩」であり、「名を顕す」という機能をもつ語として捉えられていると理解できよう。それを、「九　古事意」では、「是の体」と記し、「古事」の機能が、一首にわたる様式をなすものとしている。

次に、「新意」のばあいも、「十　新意体」の中の第一首「しほみてばいりぬるいそのくさならし」を、下句の「数々見ぬ」という内容の譬えと捉えており、「古事」と同じく、「喩」の機能が窺える。

しかも、同じ「十　新意体」の第三首「みなそこへしづくしらたま」の歌について、「三等句を以て一二句の情を顕す。故に、新意と名づく」と述べており、景物が、何らかの「情」を反映している表現を、「新意」と規定しているのではないか。

『歌経標式』においては、「古事」と「新意」のいずれについても、たしかにそれぞれの歌における機能的な面によって区別し、その点に言及しているが、それらを「古事」「新意」と命名していることには、一方を古いもの、一方を新しいものとする見方が存していたのだろう。つとに、中島光風氏『上世歌学の研究』（「歌経標式」）が、

「古事」とは、枕詞又は枕詞的な詞であって、それはそのドにつづく語句をあらわすための詞として古来慣用されて来た成語である故に「古事」と名づけたのであろう。又「新意」といふのは、そのやうな古来の慣用によらず、作者の創意によって新たに着想された語句といふ意味で「新意」といふのであらう。

と述べているのが首肯されて然るべきである。しかもその「古事」「新意」は、同じく『歌経標式』の「歌体」と並んで掲げられている「歌病」が、その内容や用語を、中国文学の「詩病」に示唆を受けたものと考えられるのと同様に、やはり、中国の文学理論、批評に学んで、歌に当てはめた可能性が高い。

この点について、小島憲之氏（『上代日本文学と中国文学　下』）は、「古事」をはじめ、『歌経標式』に用いられる語が、『文心雕龍』『詩品』などの理論書に拠ることを指摘し、たとえば、「古事」については、

観二夫屈・宋属篇一、号レ依二詩人一。雖レ引二古事一而莫レ取二旧辞一。

（『文心雕龍』巻八・事類第三十八）

其源出二于陸機一。…又喜用二古事一、弥見二拘束一。

（『詩品』中品・顔延之）

起賦志者、謂レ斥論二古事一、指列二今詞一、模二春秋之旧風一、起中筆札之新号上

（『文鏡秘府論』地巻・六志「起賦志」）

などの例を掲げている。

漢語「古事」は、一般的には、

天下遺文古事、靡レ不二畢集一太史公

（『史記』太史公自序）

河間獻王采二礼楽古事一、稍稍増輯、至二五百余篇一

（『漢書』礼楽志第二）

のように、古い事柄、古い例をさす語である。この意味に比較的近く、とくに文学作品に関して用いるのが、前掲『文心雕龍』（「事類」）の「古事」だろう。ここでは、「屈（原）・宋（玉）」などの作品が、「詩人（『毛詩』の詩人）」に学んだといわれていることについて述べ、古い事柄をさして「古事」

とし、『毛詩』の詩句そのものの方を、「旧辞」としているのである。前掲の『文鏡秘府論』（地巻・六志「起賦志」）の例も、同様だろう。[3] さらに、『詩品』（「中品」）のばあいは、顔延之の作を取り上げて、「古事」を頻繁に使用することの弊害を述べる。この「古事」は、いわゆる典故のことであり、古い事柄であると同時に古いことばのいずれをも示す。古いことばとしての典故に相当する「古事」の例としては、北斉顔之推『顔氏家訓』にみえる、

梁世費旭詩云「不レ知是耶非」。殷澐詩云「飄颻雲母舟」。簡文曰「旭既不レ識二其父一、澐又飄二颻其母一」。此雖悉古事、不レ可レ用也。（巻第四・文章第九）

があり、このような典故は、

夫設レ文之体有レ常、変レ文之数無レ方、何以明其然耶。凡詩賦書記、名理相因、此有常之体也。文辞気力、通変則久、此無方之数也。名理有レ常、体必資於故実、通変無レ方、数必酌於新声。故能騁無窮之路、飲不竭之源。（『文心雕龍』巻六・通変第二十九）

子才常曰、沈陰文章、用レ事不レ使人覚、若胸憶語也。（『顔氏家訓』巻第四・文章第九）

のごとく、「故実」ないし「用事」の「事」ともいわれる。ちなみに『国語』の韋昭注には、「故実、故事之是者」とある。[4]

一方、「新意」は、通常、新しい意義・見解といった意味で用いられる。

亦有二史所レ不レ書、即以為レ義者一、此蓋春秋新意。　（杜預「春秋左氏傳序」）

ただし、『文心雕龍』においては、

若情数詭雑、体変遷貿、拙辞或孕二於巧義一、庸事或萌二於新意一。　（巻六・神思第二十六）

若夫鎔二鑄経典之範一、翔二集子史之術一、洞（あきらかニ）暁二情変一、曲（つぶさニ）昭二文体一、然後能孚二甲新意一、雕二画奇辞一。昭レ体故意新而不レ乱、暁レ変故辞奇而不レ黷（けがれ）。　（巻六・風骨第二十八）

のように、内容や意味の新しさについて用い、この「新意」が、理論上、創造的な文章表現をさすことになる。しかも、その「新意」は、「風骨」篇において、「経典之範」「子史之術」を踏まえてはじめて可能になるものと、位置付けられていることが重要だろう。このような立場は、『文心雕龍』の「通変」篇が、伝統の継承とそれを踏まえての新しい創作を主旨として書かれていることからも知りうる。つまり、そこには、「古」と「新」とを対比的に捉える図式が存するのではないか。同様のことは、

夫設レ文之体有レ常、変レ文之数無レ方、何以明二其然一耶。凡詩賦書記、名理相因、此有二常之体一也。文辞気力、通変（スレバ）則久、此無二方之数一也。名理有レ常、体必資二於故実一、通変無レ方、数必酌二於新声一。故能騁二無窮之路一、飲二不竭之源一。　（『文心雕龍』巻六・通変第二十九）

における「故実」と「新声」の対にも窺える。その対比は、溯っては、おそらく、晉陸機「文賦」（『文

選』巻十七）の、「或襲レ故而弥新、或沿レ濁而更清」に求められよう。

当面の『歌経標式』における「古事」「新意」は、みてきたような中国の文学理論における「古事」「新意」の用語はもとより、「古」と「新」の対比的な見方を、浜也が歌に反映させようとした結果ではないか。浜成は、枕詞を、ことばのみならず様式をも含めて、古くからのものという範疇に属する表現、すなわち「古事」として、認めていたと考えうる。

以上を踏まえて、さらに注意すべきは、『歌経標式』において、一様に「古事」として扱われた「梓弓」「あをによし」の枕詞が、かたや懸詞を介する枕詞・被枕詞関係、かたや固定的な枕詞・被枕詞関係という点において、本節の冒頭部で言及した平安朝における枕詞のあらたな面に、それぞれ連なっていると捉えうることである。

## 第二節　枕詞・被枕詞関係の解消

### 一　枕詞と懸詞・縁語

『歌経標式』に取り上げられた、たとえば「梓弓　引津」のごとく、懸詞を介して地名に冠すると

いう枕詞・被枕詞関係は、もとより『萬葉集』に、

梓弓引津の辺なるなのりその花摘むまでに逢はざらめやもなのりその花

（巻七・一二七九、人麻呂歌集）

などとみえる。また、普通名詞に冠する例としても、

梓弓春山近く家居らば継ぎて聞くらむうぐひすの声

（巻十・一八二九）

がある。平安朝に入っても、固有名詞、普通名詞にかかる例として、

梓弓日置（ひき）野のつづら末つひに我が思ふ人に言の繁けむ

（『古今和歌集』恋歌四・七〇二、よみ人しらず）[4]

梓弓入佐の山は秋霧のあたるごとにや色まさるらん（『後撰和歌集』秋歌下・三七九、源宗于）

春のとく過ぐるをよめる

梓弓春立ちしより年月の射るがごとくもおもほゆるかな

（『古今和歌集』春歌下・一一七、凡河内躬恒）

などと引き継がれているが、枕詞「梓弓」に、各々「末」「あたる」「射る（焦（い）る）」といった縁語を伴わせるに至る。同様の例は、「梓弓」に限らず、すでに『萬葉集』に残る、

鳴る神の音のみ聞きし巻向の檜原の山を今日見つるかも　（巻七・一〇九二、人麻呂歌集）

ぬばたまの夜はふけぬらし玉くしげ二上山に月傾きぬ　（巻十七・三九五五、土師道良）

の枕詞「鳴る神の」「玉くしげ」についてもまた、

逢ふことは雲居はるかに鳴る神の音に聞きつつ恋ひわたるかな

（『古今和歌集』恋歌一・四八二、紀貫之）

但馬国の湯へまかりける時に、ふたみの浦といふ所にとまりて

夕月夜おぼつかなきを玉くしげ　ふたみの浦はあけてこそ見め

（『古今和歌集』羇旅・四一七、藤原兼輔）

小野好古朝臣、西の国の討手の使にまかりて、二年と言ふ年、四位にはかならずまかりなるべかりけるを、さもあらずなりにければ、かかる事にしも指されにける事のやすからぬ由を、愁へおくりて侍りける文の、返事の裏に書き付けて、つかはしける

玉匣　ふたとせあはぬ君が身をあけながらやはあらむと思ひし

（『後撰和歌集』雑歌一・一一二三、源公忠）

などと詠まれており、先掲真下氏「三代集の枕詞」が説くように、たしかに著しい特徴として指摘す

ることができる。

このような枕詞と縁語の関係は、前章（第一節一、第三節）でも触れたように、大伴家持のものした、

焼き大刀を礪波の関に明日よりは守部遣り添へ君を留めむ　（巻十八・四〇八五）

あらたまの年の緒長くあひ見てしその心びき忘らえめやも　（巻十九・四二四八）

の歌に、はやくも萌芽的に現れていた。前者においては、「礪波」に「砥ぐ」を介してかかってゆく「焼き大刀」と「守部」、後者においては、「あらたまの」から抽出しうる「玉」と「緒」とが、それぞれ縁語に近い意味のつながりをもつ。ただし、枕詞に対して縁語ともみうる「守部」「緒」が、懸詞とはなされていず、その点でも、平安朝の例が抜きんでて技巧的になっていることが知られよう。また「焼き大刀を」の歌では、「礪波の関に」以下の内容に即して、あくまで付随的に枕詞が加えられたとみうるのに対して、『古今和歌集』の、はやくもよみ人知らずの時期からは、逆に、縁語を詠み込むために、あらたに枕詞を案出したとみうる歌が現れることも留意されて然るべきである。

よにふれば言の葉茂き呉竹のうき節ごとに鶯ぞ鳴く

（『古今和歌集』雑歌下・九五八、よみ人知らず）

物思ひける時、いときなき子を見てよめる

今更になに生ひ出づらむ竹の子の憂き節茂き世とは知らずや

（『古今和歌集』雑歌下・九五七、躬恒）

歌召しける時に、奉るとて、よみて奥に書きつけて奉りける

山川の音にのみ聞くももしきを身をはやながら見るよしもがな

（『古今和歌集』雑歌下・一〇〇〇、伊勢）

真下氏は、右の第一例および先掲躬恒の「梓弓春立ちしより」の例などに基づいて、三代集の枕詞の特色として、枕詞が縁語によって歌を統一する際の起点としての役割を果しているとの解を示された。従前からの枕詞を用いる例については、その指摘は肯綮に当っていようが、あらたに創作された枕詞のばあいには、縁語の技巧を主とする意識からものしていたと考えられ、ここでひとまず、ふたつのありようを区分しておくべきであろう。大伴家持にその先蹤が認められる上に、さらに、平安朝では、枕詞に縁語を伴う例が頻出するものの、それは、枕詞のあたらしい傾向というよりも、あくまで、懸詞と、その懸詞を介在させる縁語の盛んな使用の延長であると捉えるべきである。

しかも、ここで見逃しえないのは、伊勢の歌では、「時のたつのが山河の水脈のようにはやいという感慨もこめられている」（竹岡正夫氏『古今和歌集評釈』）といわれるように、「身をはや」の懸詞「水脈速」と、枕詞「山川の」とは縁語の関係となり、それらによって「山川の水脈の速さ」が喚起

されていると捉えうる点だろう。

また、先の貫之の、

逢ふことは雲居はるかに鳴る神の音に聞きつつ恋ひわたるかな　（『古今和歌集』四八二）

の歌のばあい、「鳴る神の　音」という枕詞・被枕詞関係としては、同じく人麻呂歌集の先掲の例、

鳴る神の音のみ聞きし巻向の檜原の山を今日見つるかも　（巻七・一〇九二）

と同然である。ただし、人麻呂歌集の歌では、枕詞は、単に被枕詞と関わるのみで、文脈に関与しないのに対して、貫之のばあい、枕詞「鳴る神の」は、「雲居」という縁語を伴って詠まれており、『萬葉集』の、たとえば、

天雲の八重雲隠り鳴る神の音のみにやも聞きわたりなむ（巻十一・二六五八）

といった序歌により近い内容を有するといえよう。右の序歌では、「噂ばかりを聞き続けることか」という主意に対して、序詞の「天雲の八重雲隠り鳴る神の」の景が、「音ばかり聞えて実態を見られない」（『新編日本古典文学全集　萬葉集　三』）という、譬喩的な内容を表す。貫之の歌も、「音に聞きつつ恋ひわたるかな」の「音」に枕詞「鳴る神の」をかけるのみならず、「逢ふこと」の困難な状況を「雲居」によって譬えることによって、二層、表象性を喚起させる作品となっている。

このような、『古今和歌集』に至っての、縁語の関係となる語が組み合わされることの意味につい

ては、内田順子氏「古今集の序詞」（『ことばとことのは』第四集）の所説、

古今においてより重要なのは、このような懸詞が縁語と組み合わされ、連鎖している場合である。（略）連鎖されることによって能喩の描く世界は、ちょうど序詞の示す世界のごとく、より具体的になり、あるいは情景としての広がりを持つことができるのである。

が、肯えよう。内田氏は、序歌を譬喩の観点から、主意（本旨）を所喩、序詞部分を能喩と捉え、『古今和歌集』において中心的な懸詞と縁語の技法を、いわば、その縁語と縁語との連想によって、それが、主意（本旨）に対する序詞のように能喩の働きをするものと解しておられる。枕詞が、かような序詞の表象性を帯びた例としては、先述（第三章第一節二）したように、すでに『萬葉集』においても、大伴家持が、宴席の場で、自身の前に詠んだ、内蔵縄麻呂の序歌、

燈火の光に見ゆるさ百合花後も逢はむと思ひそめてき　（巻十八・四〇八七）

の連接部分を取り入れて、

さ百合花後（ゆり）も逢はむと思へこそ今のまさかもうるはしみすれ　（巻十八・四〇八八）

と和した作などに認められ、ここでの表象性は、自身の歌を踏まえて、「さ百合花」に女性の印象を喚起させるものであった。だが、『古今和歌集』に至っての飛躍的な展開は歴然としていよう。そのことは、たとえば同じく『萬葉集』の、

ほととぎす鳴く峰の上の卯の花の憂きことあれや君が来まさぬ　（巻八・一五〇一、小治田広耳）

の序詞の連接部分「卯の花の憂き」を、枕詞・被枕詞関係として取り込んだ凡河内躬恒の、

ほととぎすの鳴きけるを聞きてよめる

ほととぎす我とはなしに卯の花の憂き世の中に鳴き渡るらむ　（『古今和歌集』夏歌・一六四）

の歌に端的に窺える。「卯の花の」の「ウ」という同音を反復する音の契機によって、「憂き」にかかる点では両者ともに同じだが、躬恒のばあいは、おそらく、「卯の花」に「憂き」の意味を喚起するということをすでに前提とし、さらに、「ほととぎす」といえば、「卯の花」がただちに想起される景物であり、その固定的な取り合わせから、自身を「ほととぎす」になぞらえて詠むという趣向を凝らしている。すなわち、枕詞から喚起される表象性を意識して枕詞を用いるに留まらず、それと密接に関わる景物ないし縁語によって、表象される内容をより具体的にしめすという工夫が見て取れる。

ここでなお躬恒の作品に執してみると、叙上のようなあり方は、その序歌にも指摘できる。

友達の久しうまうで来ざりけるもとに詠みて遣はしける

水の面に生ふる五月の浮草の憂きことあれや音を絶えて来ぬ

（『古今和歌集』雑歌下・九七六）

「水の面に生ふる五月の浮草の」の序詞が、同音で「憂き」を導くのみならず、「音」の懸詞「根」

が、「浮草」と縁語の関係にある。「憂きことあれや音を絶えて来ぬ」という主意に対して、「水の面に生ふる五月の浮草」の「根の絶」えてしまうという情景は、取りも直さず不安な心情を暗示するものと捉えうる。だとすれば、同音を繰り返す枕詞・被枕詞関係と、さらにその枕詞の縁語を用いて詠んだ同じ躬恒の、

初雁のはつかに声を聞きしより中空にのみ物を思ふかな　（『古今和歌集』恋歌一・四八一）

の作が、「初雁」と「中空」によって、空を飛び行く雁の姿を景として取り込んでいることは、容易に推察される。加えるに、躬恒の、

吉野河よしや人こそつらからめはやく言ひてしことは忘れじ　（『古今和歌集』恋歌五・七九四）

のように、地名を枕詞として同音を繰り返す枕詞・被枕詞関係のばあいも事情は同じである。「吉野河」と「速く」によってただちに連想される、吉野川の流れの速さに、「言ひてしこと」の激しさを、喚起させていると捉えることができよう。[6]

『萬葉集』からの展開において、ここで少なくとも押さえておくべきは、とくに、大伴家持の作品の、同音の繰り返しによる枕詞・被枕詞関係に窺えた、枕詞の序詞的な機能が引き継がれ、平安朝にくだっての懸詞と縁語を併用する趣向と相俟って、再び具体的な景の描写に至り、主意に対して表象

的な意味を喚起せしめていることだろう。このような例は、同音の繰り返しによる枕詞・被枕詞関係はもとより、懸詞を介して用言に冠する枕詞のばあいにも見出しうる。躬恒の、

かれはてむ後をば知らで夏草の深くも人の思ほゆるかな（『古今和歌集』恋歌四・六八六、躬恒）

の歌では、人の「離る」に「枯る」を懸け、その「枯る」が、「夏草」の縁語として詠み込まれている。躬恒には、同じ懸詞「かる」を被枕詞として、

ものへまかりける人を待ちて、師走の晦日に詠める

我が待たぬ年は来ぬれど冬草のかれにし人は音づれもせず　（『古今和歌集』冬歌・三三八）

と詠む歌が残る。「枯る」の懸詞を介して「離る」にかかる枕詞「冬草の」が、「季節と相手への軽い恨みを表わして」（小沢氏校注『日本古典文学全集　古今和歌集』）いるとする見方もあるが、この「冬草」は、枯れている冬草の印象を喚起するに過ぎないだろう。しかし、前の歌では、「夏草の」が、その茂ったさまとして、「深し」にかかり、さらにそれが「枯る」と縁語の関係をもつことによって、そこからは、茂った夏草がいずれは枯れゆくという、時間の推移に伴う変化を読み取ることが可能である。そして、その変化に、現在の我が身とさらに未来の姿を対応させるといったように、きわめて技巧的な面を覗かせている。

『古今和歌集』には、躬恒の例に先立って、景物を枕詞とし、そこから導かれる語を被枕詞、さら

に縁語として詠んだ、よみ人知らずの、

唐衣立つ日は聞かじ朝露の置きてし行けば消ぬべきものを　（離別歌・三七五）

の歌が収められている。『萬葉集』中、「置く」にかかる枕詞には「露霜の」があり、「置く」は、「玉藻なす　依り寝し妹を　露霜の　置きてし来れば」（巻二・一三一）「うつせみの　惜しきこの世を　露霜の　置きて去にけむ」（巻三・四四三）のごとく、人をあとに残す、世をあとにするという意味での懸詞となる。また「消」にかかる枕詞として「朝露の」（巻十三・三二六六）などがみえ、譬喩的に用いられる。だが、「露」に関して、「置く」と「消」のいずれをも詠み込む例は、

秋付けば尾花が上に置く露の消ぬべくも吾は思ほゆるかも　（巻八・一五六四、日置長枝娘子）

といった序歌に多い。あるいは、

かく恋ひむものと知りせば夕へ置きて朝は消ぬる露ならましを　（巻十二・三〇三八）

夕へ置きて朝は消ぬる白露の消ぬべき恋も吾はするかも　（巻十二・三〇三九）

など、「置く」「消」のいずれをも「露」の属性と認めて詠む歌が参考になるだろう。ただし、右の歌のばあい、露の置く夕刻から朝という短時間に、露のようにはかなく消え入るということが主眼とされている。『萬葉集』の歌において、「露」を「置く」「消」と詠むことはすでに定着しており、それに基づいて、その語句を取り込みつつも、よみ人知らずの歌では、懸詞を介して「置く」にかかり、

また「消ぬべきものを」に対しては譬喩的な意味をもたせるべく、「朝露の」を用いているのである。

このような、景物とその関連する語句によって景を描きつつ、それと同時に、景に対応する自身の姿あるいは主意を詠み込む態度は、実は、前述した、『古今和歌集』のいずれの作品を通じても見出すことができる。たとえば、「梓弓春立ちしより」のばあい、「梓弓」と、それに関連する語句「はる（張る）」「いる（射る）」は、詞書の「春のとく過ぐる」ことを強調するために、「梓弓」とその縁語によって、年月の速く過ぎることを譬えていると理解できるからである。従って、縁語関係となることばを導く「物」にあたる枕詞が、景のかなめとなっているように見受けられるのは当然のことといえよう。しかし、それは、あくまで、枕詞を序詞的に使用する中での、もっとも極端なあり方として認めざるをえない。

## 二　枕詞と「異名」

一方、「あをによし　奈良」のような固定的な枕詞・被枕詞の使用は、『萬葉集』最後の大伴家持において、枕詞の使用数の約半分を占めていた。その傾向が、平安朝でさらに助長されていることはいうまでもない。すでに調査されているように、たとえば『古今和歌集』『後撰和歌集』のばあい、い

ずれも枕詞使用数の約三分の二が固定的な「あしひきの」「ぬばたまの」「ひさかたの」などであり、『拾遺和歌集』では、その比率が三割から四割と少し下がるものの、やはり「あしひきの」「ひさかたの」「ちはやぶる」という順位で枕詞が利用されているのである。[7] しかも、かような固定化を踏まえて、枕詞が名詞化する例がみえ、このことは、前掲の真下氏の指摘のごとく、平安朝の枕詞のあらたな動向の一つとなる。

しかし、すでに『萬葉集』に、その萌芽とも捉えうる、固定的な枕詞・被枕詞関係を踏まえた特殊な例が残り、それらをなおざりにはできない。たとえば、「奈良」にかかる「あをによし」については、山上憶良「日本挽歌」の反歌第三首、

悔しかもかく知らませばあをによし国内ことごとみせましものを（巻五・七九七）

の、「あをによし　国内」が問題となろう。「あをによし」のかかる唯一の例外である「国内」について、「大宰の府下」（荒木田久老『萬葉考槻乃落葉』別記）などとする見方もあるが、やはり、芳賀紀雄氏「山上憶良―老身重病経年辛苦及思児等歌―」（『萬葉』第一三五号）が、伊藤博氏「家と旅」（『萬葉集の表現と方法　下』第八章第二節）の提言をうけて、

「あをによし」によって、ただちに奈良を想起せしめ、「あをによし国内」と続けることによって、その奈良の都のある大和の「国内」へと連鎖させようとしたわけで、連鎖の仕組みは抵抗な

しに受けとめられたはずである。表現上、「あをによし　奈良内」を「あをによし国内」に組みかえたのは、「あをによし」によって喚起される奈良の都を強く印象づけるかたわら、都につながる大和に広げ用いて、「国内ことごと見せましものを」の「ことごと」の語を生かそうとしたがためであったと認められる

とする論が首肯される。

また、「ぬばたまの」といえば、

ぬばたまの妹が乾すべくあらなくに我が衣手を濡れていかにせむ　（巻十五・三七一二）

を逸することはできない。たしかに、ここで「妹」にかかるのは異例だが、

ぬばたまの妹が黒髪今夜もか我がなき床になびけて寝らむ　（巻十一・二五六四）

あるいは「ぬばたまの　黒髪敷きて」（巻十七・三九六二）に鑑みて、「黒髪」を包含した「ぬばたまの」であり、作者にとって、ことに美しい「黒髪」をもつ妻が思われていよう。同様に、

若草の新手枕を巻初めて夜をや隔てむ憎くあらなくに（巻十一・二五四二）

においても、枕詞「若草の」は、直接「新」「新手枕」にかかるとする説[8]があるが、慣用的に「夫（妻）」にかかっていくことを承知の上で、ここでは男性である作者が、「若草の妻の新手枕」としていると解すべきだろう。「若草の」については、

あをによし　奈良を来離れ　天離る　鄙にはあれど　我が背子を　見つつし居れば　思ひ遣る
こともありしを　若草の　足結たづくり　群鳥の　朝立ち去なば……
（巻十七・四〇〇八、「忽見二入レ京述レ懐之作一、生別悲兮、断腸万廻、怨緒難レ禁。聊奉二所心一」
大伴池主）

のように、「足結」にかかる例があり、池主が、女性の立場に立って、「我が背子を　見つつし居れば」のように詠んでいることからすれば、「若草の　足結」は、「若草の夫の足結」と捉えられてよい。

他にも、「たらちねの」が、

たらちねの新桑繭の衣はあれど君が御衣しあまた着欲しも　（巻十四・三三五〇或本歌）

のように、一見して「新桑繭」にかかるかと思われる歌が残る。このばあいも、「たらちねの」が固定的にかかるはずの「母」と「新桑繭」の関係が、密接なものであったことを忘れるわけにはゆかない。ちなみに、

たらつねの母が養ふ蚕の繭隠り隠れる妹を見むよしもがも　（巻十一・二四九五、人麻呂歌集）

と詠まれるように、養蚕が、一家の女性、特に母親が携わる生業であることからして、作者の身につけている「新桑繭の衣」は、母親の手になるもので、「たらちねの新桑繭の衣」は、「たらちねの母の新桑繭の衣」の謂と捉えられる。

以上は、「あをによし―奈良」「ぬばたまの―夜」「ぬばたまの―髪」「若草の―夫（妻）」「たらちねの―母」の固定化を前提とし、これらの枕詞から、ただちに直接する被枕詞が想起されることに依拠して作られたものと判断できる。さらに、被枕詞と解されるばあいもある「国内」「妹」「新手枕」「足結」「新桑繭」は、実際は枕詞のかかる本来の被枕詞の語と密接な関係をもつ語であり、本来の被枕詞がことばの上で略されていたとしても、それを詠んだ当時の人々にとっては、なんらの不自然さもなかったはずである。

ただし、大伴家持の次の例はいささか事情が異なる。すでに「あしひきの―山」と固定化をみせている「あしひきの」に関して、

大伴家持霍公鳥歌二首

夏山の木末の繁にほととぎす鳴き響むなる声の遥けさ　（巻八・一四九四）

あしひきの木の間立ちくくほととぎすかく聞き始めて後恋ひむかも　（一四九五）

といった歌を作っており、第二首の「あしひき」は、第一首の「夏山の木末」に対応させつつ「あしひきの山（夏山）の木の間」とするという、連作を前提とした用法であって、単独では成り立たないものである。加えて、

四月十六日夜裏遥聞霍公鳥喧述懐歌一首

ぬばたまの月に向ひてほととぎす鳴く音遥けし里遠みかも　（巻十七・三九八八、大伴家持）

と詠む例においては、「ぬばたま」の「黒（暗さ）」と対比的な月の明るさを際立たせるべく、「ぬばたまの」を用いていよう。「ぬばたまの」が、「夜の月」の意味での「月」にかかってゆくあり方ではなく、「ぬばたまの」に被枕詞の「夜」が包摂された、提喩的なかたちが認められる。

『萬葉集』における枕詞・被枕詞関係の固定化は、とりわけ後期において、このような歌の詠まれるいわば下地になっていようが、少なくとも当時の、たとえば家持の意識としては、被枕詞の意味を包含して独立した名詞ではなく、あくまで提喩として用いていよう。

ならば、枕詞・被枕詞関係の固定化を前提として成立する枕詞の名詞化は、平安朝にくだって、歌論書に「異名」として取りあげられるに至ることと、決して無縁ではなかろう。すなわち、「異名」の例は、撰者が喜撰に擬せられる『倭歌作式（喜撰式）』に、

凡詠レ物神世異名在レ此。和歌之人何不レ知レ此。如レ先可レ云也

とみえ、約八十余例が掲げられている。これを祖述した源俊頼『俊頼髄脳』では、

よろづの物の名に、みな異名あり。これらをおぼえて、詠まれざらむ折は、つづきよきさまに、つづくべきなり

と説く。また、『俊頼髄脳』に先立つ『能因歌枕』について、中島光風氏「『歌枕』原義考証」（『上世

歌学の研究』）は、その内容を、（一）歌詞を注釈した項、（二）枕詞（もしくは物の異名）をあげた項、（三）名所を説明した項、といった三つに分類し、（二）の枕詞に関する項目（袖中抄所引）については、

「塩海をしてるやといふ」、「うは玉とはくろき物を云ふ」、「神風とは伊勢を云」などいった風の説明のし方から見て、これらの枕詞に対してはたしてどれだけの認識を持ってゐたかは疑問であり、おそらく喜撰式における神世異名の項のごとく、塩海、くろき物、いせなどの詞の単なる異名もしくは別称として理解してゐたのではないか

と、考察している。[9]『能因歌枕』にみえる例を、『倭歌作式』中の「異名」に関連づけた論考であり、これに従って、『能因歌枕』をも当然考慮すべきであろう。たしかに、『俊頼髄脳』における「異名」の例が、『倭歌作式』のみでなく、『能因歌枕』などの例も取り込んでいると見受けられるからである。

これら『倭歌作式』『能因歌枕』『俊頼髄脳』の中から、「異名」の主なものを挙げるならば、[10]「ひさかた＝月」「あしひき（あしびき）＝山」「たらちね（たらちめ）＝母」「たまほこの（たまほこ）＝道」「草枕＝旅」「ももしき＝内裏（大宮）」「しきしま（しきしまの）＝倭（大和）」「あかねさす＝日」「ちはやぶる＝神」「わかくさの（わかくさ）＝婦（わかきめ）」「むばたま（むばたまの・うばたま）＝髪」「ぬばたまの（ねばたま・またま・むばたま）＝夜」「ぬるたまの（ぬるたま・むばたま・

ぬばたま）＝夢」「しきたへの（しきたへ）＝枕」「しろたへの（しろたへ）＝衣」「あらたまの（あらたま）＝歳（年）」「あをによし＝なら（ならの京・平城京・南京）」「さきたけ＝君」などがあり、これらは、枕詞と被枕詞の関係によって成立していると捉えられよう。

以上の例を一瞥してみると、さきに、提喩的な枕詞としてみた枕詞・被枕詞の関係をはじめとして、当然ともいえようが、すでに上代において固定化をみせている枕詞・被枕詞関係の例が含まれており、なおかつ、すべて「名詞ー名詞」の形態を示していることが知られる。さらに、「たまくしげ＝暁」「むらとりの＝別」などの例もみえるが、各々、『萬葉集』中の「たまくしげー開く・明く・蘆城」、「むらとりのー朝立ち・出で立つ」の枕詞・被枕詞関係から容易に推測され、これも右の例に準じて扱ってよいだろう。ただし、その「異名」の関係は、枕詞・被枕詞の関係に戻して考えるならば、被枕詞を懸詞として用言を介して連接する例、ないし被枕詞が用言であるばあいであり、いささかその関係のあり方が異なるうえに、前掲の歌論書においても、この二例にとどまる。

これらのうち、まず「名詞ー名詞」の形態を示す「異名」について、実際の作歌例に徴してみると、先にも触れたように、依然として、慣習的に枕詞・被枕詞の関係による用法が残ることはもとよりだが、一方で、「異名」が文字どおり別名として用いられている例が認められる。先の『倭歌作式』以下の、掲出順に従って挙げてみる。

桂に侍りける時に、七条の中宮とはせ給へりける御返事に

久方の中におひたる里なれば光をのみぞたのむべらなる（『古今和歌集』雑歌下・九六八、伊勢）

山

あしびきのこなたかなたに道はあれど都へいざといふ人ぞなき

（『新古今和歌集』雑歌下・一六九〇、菅原道真）

初めて、頭おろしはべりける時、物に書きつけ侍ける

たらちめはかかれとてしもむばたまの我が黒髪を撫でずや有けむ（11）

（『後撰和歌集』雑三・一二四〇、遍昭）

手向け

たまほこの手向けの神も我がごとく我が思ふことを思へとぞ思ふ

（『古今和歌六帖』第四・二四〇四）

常陸へまかりける時に、藤原公利によみてつかはしける

朝な日に見べききみとし頼まねば思ひたちぬる草枕なり　（『古今和歌集』離別歌・三七六、寵）

歌召しける時に、奉るとて、よみて奥に書きつけて奉りける

山河の音にのみ聞くももしきを身をはやながら見るよしもがな

（『古今和歌集』雑歌下・一〇〇〇、伊勢）

これをだにかたみとて見ばむばたまの思ひ乱るるときなからなむ　（『貫之集』七四四）

かしらいとひさしうけづらで、かみのみだれたるにも

物をのみ乱れてぞ思ふ誰にかは今はなげかんむばたまの筋　（『和泉式部続集』七二）

ぬるたまのうちにあわせしよきことをゆめゆめかよひちがへざらなむ（『相模集』三一三「ゆめ」）

ぬきためて数もみるべくあらたまのをはりにだにもあひみてしかな　（『伊勢集』一八一）

すなわち、「ひさかた」「あしひき（あしびき）」「たらちね（たらちめ）」「たまほこの（たまほこ）」「草枕」「ももしき」「むばたま（ぬるたま）」「あらたま」の例である。また、少しく時代がくだるが、

雲間　微月といふ事を

しきしまや高円山の雲間より光さしそふ弓張りの月（『新古今和歌集』秋歌上・三八三、堀河院）

における「しきしまや」[12]もその例となる。とりわけ「たらちね（たらちめ）」「ももしき」は、八代集を通じて「異名」としての例が、顕著である。

反面、その「異名」としての使用例には、実は偏りが存する。すなわち、「あかねさす」「ちはやぶる」「わかくさの（わかくさ）」「しきたへの（しきたへ）」「しろたへの（しろたへ）」などは、歌論書において「異名」として掲出されてはいるものの、現存の作品では、おおむね枕詞の用法として踏襲

されている。[13] たとえば、

あかねさす日に向かひても思ひいでよ都ははれぬながめすらむと

（『詞花和歌集』別・一七八、藤原定子）

ちはやぶる神無備山のもみぢばに思ひはかけじうつろふものを

（『古今和歌集』秋歌下・二五四、よみ人知らず）

春日野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり

（『古今和歌集』、春歌上・一七、よみ人知らず）

わが恋ひを人知るらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ

（同右、恋歌一・五〇四、よみ人知らず）

しろたへの衣かたしき女郎花咲ける野辺にぞ今宵寝にける

（『後撰和歌集』秋中・三四二、紀貫之）

のごとくである。

さらには、「あをによし＝なら」「さきたけ＝君」のばあい、その「異名」の例を徴しがたいのみならず、枕詞・被枕詞の例も見当らない。以上、現存の作品に即する限り、傾向としては、大きく三分類される次第となろう。この辺の事情は、詳らかにしえないが、本論文では、第一の例を主たる対象

とすることもとよりである。

なお、枕詞・被枕詞の連用関係を介して成立したと捉えうる「異名」、すなわち「たまくしげ＝暁」「むらとりの＝別」について言及しておくと、「たまくしげ＝暁」の「異名」の例はみえず、同じ懸詞「あく」を介してかかってゆく、

玉くしげあけば君が名たちぬべみ夜深く来しを人見けむかも

（『古今和歌集』恋歌三・六四二、よみ人知らず）

のような、枕詞としての例が確かめられるのみである。同様に、「むらとりの＝別」についても、

群鳥の立ちにしわが名いまさらに事なしぶともしるしあらめや

（『古今和歌集』恋歌三・六七四、よみ人知らず）

といった、枕詞の例が存するにすぎない。

ただし、「あをによし」を用いて詠んだ、

秋を経てかはらざりけりあをによしふるき都の鈴虫の声

（永久百首、常陸）

の歌の「ふるき都」は、「奈良」をさしており、固定的な枕詞・被枕詞の関係に近い。また、「若草の」については、「若草」に被枕詞の「婦（つま）」の意味を表象させて、譬喩的に、

うら若み寝よげに見ゆる若草をひとの結ばむことをしぞ思ふ

（『伊勢物語』四十九段）

と詠む例がみえる。「草枕」のばあい、そのような用法がむしろ主流となっており、

甲斐国へまかりける時、道にてよめる

夜を寒み置く初霜をはらひつつ草の枕にあまたたび寝る（『古今和歌集』羇旅・四一六、躬恒）

のように、「草の枕」は、実際に旅で用いる枕として詠み込まれている。さらに、右の歌では、「あまたたび」の懸詞「旅」と縁語関係となっていよう。「むらとりの＝別」についても、

一条摂政みまかりてのちのわざのことなど果てて人々散々になりはべりければ

いまはとてとびわかるめる群鳥の古巣にひとりながむべきかな

（『後拾遺和歌集』哀傷・五六七、藤原義孝）

の歌では、「とびわかるめる群鳥」と詠まれており、「別」の「異名」とされている「群鳥」を、「別れ」を表象する景物として見做すことも可能であろう。

かくみると、「異名」の成立には、枕詞・被枕詞の固定化が前提となっており、とくに大伴家持の作品に窺えるような例の必然の結果として、その延長上に位置付けられよう。加うるに、以上のような固定的な枕詞と被枕詞の関係にかかわる「異名」は、「たまくしげ＝暁」「むらとりの＝別」といったわずかな例外はあるものの、基本的に枕詞と被枕詞の関係は、「名詞－名詞」の関係、等価であること、懸詞を介さないことの二要素を兼ね備えているといえる。

## 三　枕詞の行方

『歌経標式』に取り上げられた、懸詞を介する枕詞・被枕詞と、被枕詞の属性を抽出した固定的な枕詞・被枕詞という二種の関係は、まさしく、平安朝における特徴的な展開を担った。そして、そのふたつの展開は、くだって、藤原清輔の『和歌初学抄』において、分類項目の「秀句」「物名」に、それぞれ受け止められているものと認めうる。

「秀句」について清輔は、「歌は物によせてそへよむやうあり。なぞらへ歌といふにや。」と説明した上で例を挙げる。中から、枕詞と関わるものを取り出すならば、

玉匣　ミ　フタ　カケゴ　アク　オホフ　イル　ヲ　クチ　カナ物　マク
　ゆふされば　おぼつかなきをたまくしげ　ふたみのうらはあけてこそみめ

弓　ハル　ヒク　ツル　ハズ　トモ　アタル　タム　タメ　ソル　イル　フス
　ユヅカ　マト　カヘル　モト　スエ　オク　ツクル…
　あづさゆみおもはずにしていりにしをひきとどめてぞふすべかりける

竹　ヨ　フシ　ネ　ハ　エダ　スエ　タケノコ　フルネ　シゲル

よにふればことの葉しげきくれたけのうきふしごとにうぐひすぞなく

草

オフ　フカシ　シバフ　シゲル　シゲシ　カル　ヤク　ツユ　ムマ　ウシ

カマ　アサシ　ムスブ　クサガレ　クサタチ　ワク

かれはてむのちをばしらで夏草のふかくも人のおもほゆるかな

錦

オル　アラフ　サラス　タツ　カク　シク　タテ　ヌキ　ハタ　キル　ムラ　ヲシ

おもふどちまどひせるよはからにしきたゝまくをしき物にぞありける

霧

タツ　コム　ハル　ヘダツ　フル　ハレズ

あさぎりにともにたちでゝわかれなばはれぬおもひにもえやわたらむ

雨

フル　クダル　ソヽグ　モル　タナビク　コマカ　ウツ　クモル　ヌル　ハル　ハレズ

シタヽル　アシ　オト　ウガツ　ヤム　フリク　ヲヤム　フリマサル　ノキノタマミヅ

はるさめのふるめかしくもつぐるかなはやかしはぎのもりにし物を

などが主なものである。右の「玉櫛笥」「竹」「草」に引用されている歌は、前掲の歌に該当し、それらの歌から知られるように、枕詞の方が最初に掲げられた「物」、被枕詞さらに枕詞の縁語となる語の方が「物」に即して導かれる語として理解できる。「秀句」の他の項には、やはり、「物」とそれに関連する語および歌が掲げられている

山　カヒ　ミネ　タニ　タケ　タカシ　ノボル　オル　ヲ　ヰ　サカ

としをへてかよふ山ぢはかはらねどけふはさかゆくこゝちこそすれ

鏡　ミガク　トグ　テラス　カゲ　クモル　アキラケシ　ウツル　ミル　ハコ　ネル　ソコ

花のいろをうつしとゞめよかゞみやまはるよりのちのかげやみゆると

前者「山」の引用歌では、「さかゆく」の懸詞「坂」と「山ぢ」とが縁語の関係、また、後者「鏡」の引用歌では、「かゞみやま」の懸詞としてみえる「鏡」と「かげ」「みゆる」が縁語となっており、いずれも、懸詞と縁語の技法を駆使した歌である。そのような歌が、「秀句」と見做され、前述したような懸詞を介する枕詞・被枕詞関係の例も見出せることについては、真下氏先掲論文が、

三代集の中心をなす枕詞の用法は枕詞そのものではなく、いわゆる雅言、雅語を基盤とした縁語、かけ詞を駆使する三代集独特の表現技巧の中に還元同化されてしまったとさえ言えるのである。

と述べている点に集約されよう。見方を換えれば、枕詞と被枕詞の関係は、「物」と縁語の関係となるに至ったという次第になる。

枕詞・被枕詞関係は、ある「物」に寄せて主意を詠むべく択び取られたその「物」と、それに関わる縁語として本来の関係を解消すると同時に、また一方で、「異名」として変化を来すに至った。「異名」については、前述したごとく、先立つ歌学書においてすでに注目されていたが、『和歌初学抄』

では、「物名」が、それと同じ内容をもつ。掲げられている典型的な例をいくつかを示せば、

月　ヒサカタ　サヽラヘヲトコ　カツラヲトコ　…

山　アシビキ　タカサゴ

道　タマホコ

内裏　モヽシキ

枕　シキタヘ

などであり、この「物名」に記される他の項、たとえば、

雪　シラユキ　フスマユキ　アワユキ　ハツユキ　カタビラユキ　オホユキ　ミユキ
　トモマツユキ　フヾキ　クツユキ　ケノコリユキ

泡　ウタカタ

といった項に照らして、『倭歌作式』の「異名」および『能因歌枕』の例と同様に、おそらくは歌語としての意識が強いだろう。

さらに、『和歌初学抄』には、依然として固定的な枕詞・被枕詞が多用されている実際に即して、注目すべき分類項目がみえる。すなわち、「次詞」であり、それについて清輔は、「さだまりてつゞけてよむことあり」と記す。具体的な例としては、

あかねさすひ　ひさかたの月又ソラ　あらたまのとし　やくもたついづも
あまざかるひな　あをによしならのみやこ　あしびきの山　いその神ふる
しきしまのやまと　神かぜのいせ　たまほこのみち　くさまくらたび
むばたまのヨル又クロガミ　ぬばたまのゆめ　ちはやぶる神　たらちねのおや
しきたへのまくら

などがあり、これらが、「次詞」の例の大半を占める。ここにおいて、固定的な枕詞・被枕詞は、まさしくひとつの慣用句として把握されていたといえよう。

ただし、これらの固定的な枕詞・被枕詞の例が引かれるのは、「次詞」の項のみとは限らない。「古歌詞」の項では、『萬葉集』と『古今和歌集』から『後拾遺和歌集』までの勅撰集、および『伊勢物語』の書目ごとに歌詞が挙げられており、たとえば『萬葉集』の箇所では、

いその神ふるのわさだ
あしびきの山まつかげ
うちひさすみやぢ
しきたへの枕うごきていねられず
わか草のにひたまくらをまきそめて

あづさゆみするはしらねど
しきたへのまくらをまきて
もゝしきの大宮人

などが注意を引く。ここでは、枕詞・被枕詞のみならず、数句にもまたがって引用しており、すくなくとも、それらの語句を、古くからの表現、古めいた表現と認めていたことは確かであろう。同様に、「喩来物」の分類項目に、

ふるき事には　ナガラノハシ　イソノ神　フルノヤシロ
世中にふりぬる物はつのくにのながらのはしとわれなりけり
よそなる事には　アマグモ　アサクラ山　タカマノ山　ヒトヅマ
あまぐものよそにも人のなりゆくかさすがにめにはみゆる物から

などがみえ、「むかしよりいひならはしたること」と説明している。ある事柄を、ある物になぞらえるあり方は、「秀句」の項目におけるそれと逆の捉え方に近いが、やはり、清輔が、昔より定まった詠じ方との観点から設けた項目であり、そこにみえる枕詞を、古くから慣用されているものとみていたことは動くまい。

平安朝にくだっては、叙上のように、固定的な枕詞・被枕詞の関係において、枕詞が被枕詞を包摂

し、提喩的なありようをみせる『萬葉集』のとくに大伴家持の作品の延長上に、枕詞を被枕詞の「異名」として用いるに至った。また、枕詞が案出されているようなばあいでも、それは、懸詞と、懸詞を介在させる縁語の盛んな使用の要請に拠ったと解される例が目立つ。従って、平安朝の、枕詞にかかわる一連の特徴は、本来の枕詞・被枕詞関係からすれば、その実質を失ったとはいえ、枕詞・被枕詞の、歌語としてのあらたな再生とその展開を示したものと位置付けられよう。

注

（1）白井裕子氏「枕詞の消長」（「国文目白」第五号）

（2）『歌経標式』真本系は、本文を「雑体」とするが、抄本系の「雅体」の本文に従う。

（3）『弘法大師　空海全集　第五巻』所収、『文鏡秘府論』の興膳宏氏訳注は、当面の「六志」について、撰者不詳『文筆式』から引用した可能性が高いとしている。なお、「六志」の下に「筆札略同」の原注があり、これは、初唐上官儀撰『筆札華梁』である。

（4）『国語』韋昭注の「故事」は、「余所謂述故事、整齊其世伝、非所謂作也、而君比之於

春秋、謬矣」（『史記』太史公自序）に同じく、古い事柄を意味する「古事」と同義に用いられていると考えうる。「古」と「故」は通用するが（郝懿行『爾雅義疏』釈詁下）が、「故事」が、いわゆる典故の意味を有するのは、北宋代あたりにくだってからだろうか。ちなみに、その意味での「故事」の例を、『漢語大詞典』は、北宋欧陽修『六一詩話』から引いている。

（5）八代集および『古今和歌六帖』の歌番号は、『新編国歌大観』による。

（6）片桐洋一氏『古今和歌集全評釈』。また、躬恒の作以外の例としても、

白川の知らずとも言はじ底清み流れて世々に住まむと思へば

（『古今和歌集』恋歌三・六六六、平貞文）

が挙げられ、これは、いつまでも夫婦として暮らして行こうとの思いを、「白川」「底」「流れ」「澄む」の縁語によって、「私の心は白川の底のように清らかだから」（小沢正夫氏校注『日本古典文学全集　古今和歌集』）といった内容を加えている。

（7）注（1）前掲論文、および滝沢貞夫氏「拾遺集時代の枕詞」（『国語と国文学』昭和四十八年一月号）。

（8）賀茂真淵『冠辞考』、鹿持雅澄『萬葉集古義』（萬葉集枕詞解）参照。

（9）注（1）において、「異名」の中に枕詞がふくまれることについては、「要するに枕詞の概念がまだ明確

でなく、文字通りの異名と識別できずに、両者を混同して考へていたのが当時の歌人の実状であった」という考えを示している。

(10)『奥義抄』にも「物異名」が掲げられているが、「略抽ゝ要」とあるごとく、そのほとんどが、『倭歌作式』の例を出ない。

(11)「たらちね」については、片桐洋一氏『歌枕歌ことば辞典』にその語史が整理されている。片桐氏に拠れば、平安時代になると、実体は母であるが、ことばとして「親」にかかるようになり、さらに

たらちねははかなくてこそやみにしかこは何処とて立ちとまるらむ

(『後拾遺和歌集』雑五・一一五六、源頼俊)

のように、「父」の同義語や、また「親」の同義語となる一方、「母」だけをいう別の語「たらちめ」ができ、「たらちを」で「父」の意を持たせた例もあるという。これらは、「異名」として用いられる顕著な例といえよう。

(12)『萬葉集』に、「神風之伊勢の浜荻折り伏せて」(巻四・五〇〇、碁檀越妻)とある同じ歌の第一句が、『古今和歌六帖』(第四「旅」・二四〇七)では「神風や」として収めていることからも知られるように、平安朝に至ると、枕詞をはじめとして五音句の末尾に、しばしば「や」

が用いられる。富士谷成章『あゆひ抄』（巻一・五属、第一　詠属）では「冠（枕詞）」の「や」について、

この「や」文字、よみやうこそあれ、たとへば「逢坂」「武蔵野」を立ててよまんとするに、「逢坂の」「武蔵野は」などよめば、ことわりはあれど、借りてしも来たらんやうにゆほびかならず聞こゆるを、かく寛げて詠め捨てたり

と、言及している。

（13）永承三（一〇四八）年か四年の開催と推定される「六条斎院歌合」（陽明文庫「二十巻本類聚歌合」所収）に、

しきたへはまくらのいけとなるままに死ぬばかりこそ恋ひしかりけれ

という別当の作が残り、『新編国歌大観』（第五巻、神尾暢子氏校訂）は、その傍書によって、第二句を「なみだのいけ」に校訂している。本文の通り「まくら」では意味が解しがたく、傍書によれば、「しきたへ」はすなわち「まくら」の「異名」と捉えられる。本文は、けだし、「しきたへのまくら」の慣用的な枕詞の用法に引かれたのであろう。「異名」の用法と、枕詞の用法の間の揺れとして、ひとまず考えられる。